

ポラリスを仰ぐ北の大地から



二つの同窓会

紋別医師会 会長 小林 正司

紋別で高校と大学の同窓会活動に参加して30年以上経過しました。

紋別高校の方は、直近の8年間は同窓会長をしておりました。現役在校生の教育環境の改善や部活動の支援等も目的のひとつです。

毎年8月14日の夕方に市内のホテルで同窓会総会があり、議事終了後、即ビアパーティ開催となり当番幹事が盛り上げてくれます。

市内の企業から寄付された景品が抽選で当たる企画では、全員に1個以上は約束されています。

参加人数は毎年150人くらいです。

今年は、札幌から初めて参加してくれた同級生と、52年ぶりに会って話をする機会があり、楽しく過ごし、同窓会の存在価値を再確認しました。

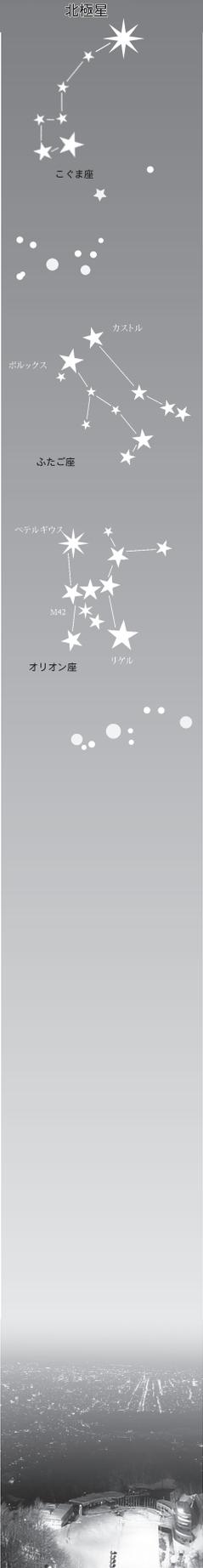
もうひとつの同窓会は北海道大学同窓会紋別支部という会で、市内在住の同窓生二十数名が会員で、これは転勤等でメンバーは変わったりします。

事業としては、母校から毎年紋別で合宿トレーニングする団体へ助成金、北方圏国際シンポジウムへの協力等を行っています。

毎年4月下旬に総会、懇親会を開催、15名くらいの参加なので、それぞれ近況報告。皆さん職業も違うので珍しい話、楽しい話が聞けます。飲みながらの雑談で盛り上がり、テープ伴奏で「都ぞ弥生」を歌って終了。二次会もあります。

この様に異なった形の同窓会に、役員をしている関係もあり、出席を続けています。

今後も両同窓会に協力を続けながら、仲間との集まりを楽しみたいと思っています。



ブラックアウト

遠軽医師会 会長 田中 実

今回の北海道胆振東部地震では多数の被災者がおられ、皆様には心よりお見舞い申し上げます。直接被災がなかった当地でも北海道全域の停電「ブラックアウト」は想定外の出来事だった。

病院は業務の少ない早朝で水道やガスが使用できたため大きな混乱はなかった。必要最低限の電力は小型発電機で対応したが、過去に1時間ほどの使用経験しかなくほとんど神頼み状態だった。給水は貯水槽水道方式のため、職員には4階までバケツでの水運びをお願いし苦勞をかけた。手書きカルテなので外来診療はできたが、薄暗い診察室ではカルテの文字が見えにくく老眼の進行を痛感した。

「電気の復旧は1週間以上先」、「水道は数時間後に止まる」など、不安をあおる情報が入り乱れたが、院内では役場や消防とも連絡を取り合い、お互いの情報を共有したため職員も冷静に行動できたようだ。

日没後は詰所を中心に懐中電灯を寄せ集めて対処した。トイレへ通う患者に合わせた廊下の明かり確保に問題があったが、翌朝には通電し大きなトラブルなく済んだのは幸運だった。後日院内での必要物品など検討したが、危機に備えるということは「何も起こらなければ無駄になる」ような経済的余裕を持つことでもあり、あらゆる災害への備品確保は経営上悩ましい問題である。

停電中はロウソクの明るさを再確認し、田んぼと畑に囲まれて育った子供の頃に見上げていた星空が見られ、十数年前のゴルフコンペの景品で、使うことはないと思いつつもながらも棚の奥にしまい込んでいた携帯ラジオが日の目を見たなどほっと一息できることもあった。停電2日後の夜に、この広い北海道のほぼ全域に通電したのは北海道電力職員ならびに関係者の献身的仕事の賜だったと思うが、人災に近いと言われているブラックアウトだけは二度と経験したくないというのが本音である。